

第4回市民連合全国意見交換会の報告

◇期日と場所 2017/9/10 10:30~16:20 東京・全日通霞が関ビル大会議室

◇参加者 190名 (約40都道府県)

◇次第

1 全体会

開会挨拶・高田健(総がかり行動) / 市民連合の紹介・広渡清吾(東大名誉教授、前日本学術会議会長) / 政治状況の整理・山口二郎(法政大教授) / 仙台市長選挙の報告・新里宏二(オールみやぎの会、弁護士) / 埼玉県の運動の広がり・小出重義(オール埼玉総行動実行委員会) / 青森4区補選に向けて・神田健策(青森9条の会共同代表、前弘前大学教授) / 政策協議の進め方・竹内彰志(市民連合、弁護士) / 市民選挙の取り組み・山本雅昭(市民連合事務局)

2 分散会 12のグループに分かれて情報交換と課題の議論

3 全体会 分散会報告 / 野党共闘の今後・中野晃一(上智大学教授、市民連合共同代表)

◇主な発言要旨

○高田健氏(開会の挨拶)

安倍政権を打破する道は、立憲野党4党と市民が一体となって闘うしかない。それによってこそ、現状を打開できる。いま多少難しいことがあっても、この道を切り開いていくことが大事だ。

○広渡清吾氏(市民連合の経緯の紹介)

2015.9.19の安保法成立後、市民と野党との意見交換が始まり、野党の結束と共闘、市民との連携によって政権交代が必要だと提起したが、野党はすぐには受け入れなかった。同年12月に市民連合を発足させ、安倍政権打倒へ向けて野党共闘で闘い、市民と連携していくように働きかけをつけた結果、2016.2.19になってようやく「野党4党党首の合意」が発表された。当時の民主党幹事長の枝野幸男氏が市民の集会の場に現れ「みなさん、お待たせしました」と、4党党首会談の合意を発表した光景は忘れられない。

その結果、参院選比例区では最高170%の上積み票を得て、共闘すれば無党派層の票が上積みされることを立証した。

70年代の「ベ平連」83年参院選で行われた「革新市民連合」の2つの経験と比べると、いま私たちが取り組んでいる市民連合の運動は2つの点で大きく異なる。

市民が単独で闘うのではなく、

①市民がトータルな政策要求を掲げ、

②市民運動が野党の接着剤として、野党の結束を促し、市民が結集して野党に結束を迫る。野党にとっても、政党ありきではなく、主権者国民ありきで、いま国民が抱えている問題を市民と一緒に解決していくというプラスがある。

私たちの運動は、安倍政権に対して、市民が政党に政策を提示し、一緒にやろうと迫る。市民と政党、野党と市民の新しい関係をつくり出す歴史的な運動である。

○山口二郎氏 (別稿参照)

○中野晃一氏 (全体会での最後のまとめ)

- ・リベラルな個人を組織的につないでいく作業は、砂で城を造るようなものだ。「野党共闘」や「市民の共同」も完成形はない。「よりましな結果」を出していこうとするに過ぎない。
- ・深刻なのは、当面する3つの補選だ。安倍政権も、3つとも勝たねば終わるかもしれない。前原民進党も、1つでも勝たねば持たないかもしれない。そのような状況の中で、野党が共闘して結

果を出していかねば、次がない。

- ・その際に、完成形の野党共闘は厳しい。大事なものは、私たちにとって譲れない条件は何なのか。それを確認して、取れるものは取る。終わった段階でいいものがあれば、次への財産になっていく。参考になるのは、新潟知事選だろう。結果を出して、それが広がっていく。政治と政治家を育てていくつもりで、根強く関わりながら、政治を変えていくしかない。
- ・これまでは、安倍政治を阻止することが大きな課題だったが、都民ファーストが出てきた中で、トンビに油揚げをさらわれてしまうかもしれない。安倍は辞めたが、全体として右への流れも、改憲の流れも続いていけば、もっと目も当てられない状況になるかもしれない。
完成形はできなくても、出口を考えて、ある程度いい結果を出していくようにしなければならない。

◇分散会の議論と報告から

○運動の到達段階の差と多様性

全国都道府県や選挙区によって、運動の到達段階には大きな差が存在する。参院選では 32 の一人区における「候補の一本化」作業だったが、衆院選では 280 もの選挙区で同運動を進めるか、多様な困難を抱える。

- ⇒ ・ 府県レベルでの連携と、選挙区ごとの市民連合を組織し、候補者との連携を図っていくことが重要だ。
 - ・ 政党側も、各地域による温度差や事情の相違があり、全国一律に動くわけではない。それぞれの地域の状況を踏まえた多様な取り組みを進め、全国の情報を交換しながら、地方から中央を変えていく取り組みが大切だ。
 - ・ 概括的にいうと、東京、神奈川、千葉、兵庫などの大都市部で、市民側の組織が府県レベルと選挙区レベルで進んでいる。

○民進党との関係性、対応の課題

基本的には、政党内部の体制や方針に関わることは困難なので、そのことにあれこれエネルギーを費やしても仕方がない。

- ⇒ ・ 民進党の綱領には「立憲主義を守る」と明記されている。こうしたことを突破口に、各選挙区の現場で議員や候補予定者との関係を密にし、現場から流れをつくっていくことが大事だ。党本部も「方針は党本部が決めること」というのは、現場の思考停止だと地域の現場で柔軟に対応することを求めている。現場第一主義でいこう。
 - ・ 党の連携できる人を通じて、パイプを構築する。

○運動の広げ方

- ・ 普通の市民にも響く、市民の関心の高いテーマや地域性のあるテーマを掲げて、政治を変えるつなかりを広げていく。
- ・ 政党が用意した候補を市民が応援する枠組みの中でも、魅力的な応援の仕方を工夫する。
- ・ 政党が決めた候補者を一本化していく過程で、市民が関わる。
- ・ 魅力的な候補者にしていくための方策を工夫する。ないものねだりからの脱却。
- ・ 「野党共闘」という堅いキャッチコピーを、柔らかくする工夫を考える。

以上